

## 教育心理学教室教官の研究状況報告

この1年の歩み —昭和47年— 村上英治

1. この1年、私は私にとって20年来の研究生活におけるあるいは仲間であり、あるいは道しるべともしてきた人を3人も失った。痛惜の思いに耐えない。その1人はこの3月の下旬、3か月にわたる闘病のはてにたおれた東京教育大の杉田助教授である。高校・大学を通じての先輩として、また私自身の精神薄弱児への関心をよびさましてくれた忘れがたい人である。その骨を拾って半月、4月の中頃には、名古屋大学精神科の植元助教授の骨をまた拾うことになった。私が最初にその教室へ入局して以来丁度21年になる。その間、ロールシャッハ法の検討、文化とパーソナリティの研究などをとおして、私のよい共同研究者であり、また批判者でもあった。臨床心理学に深い理解を示してくれた精神科医として、負うところ大きかったことを、今改めて思う。それから半年、9月下旬には、敬愛する学問上の先輩として、また20年来の研究グループの一員としても、とにかく公私ともに世話になること多かった統教授の急逝に出会った。心理学的に人間を見る目を私はこの先輩から学んだ。私自身の今日までの研究に、この種の位置づけを与えてくれたこの3人の死は、あまりにも早く、またあまりにも突然のことであったが故に、私にとってこの上なく痛切である。今はただ、こうして深い影響を与えてくれた人の業績をたたえ、それらをまたのりこえていくことが、残された同学として、また後学としての責務と思う。ここに改めて深く哀悼の意を表する所以である。

2. 日本臨床心理学会は大きく変革しようとする。昨年家政学院大学での総会を契機に、改革準備委員会が結成され、私自身もそうした時代の流れの中で、今日における臨床心理学の志向するところは何かを、常に自己課題として問いつづけてきている。路線的に必ずしもこの改革委員会の方向性と一致するものではないにしろ、私はこの種の変革の意義を十分うけとめていきたいと思う。それが故に、私は私なりの要望を、日本臨床心理学会今年度の小金井総会(47年10月)で提示してきた。臨床実践と不即不離の臨床研究を、新しい路線の中でも着実にすすめていきたいとの願いにはかならない。

3. これらの志向に沿っての、私の1つの仕事は、ここ4、5年継続してきた。精神病院現場での臨床仲間と共同の、現象学的接近のオリエンテーションに立つもの

である。名市大木村助教授の提唱する「中核分裂病」の概念を、個々の症例にあたってくわしく検討するとともに、それら症例へのロールシャッハ法をとおしての接近を、現象学的方法に準拠してすすめようとするものであった。隔週のあるいは合宿しての研究会をとおして、今日までかなりの症例をつみあげてはきた。この年度末にはそれらをまとめあげるつもりでいる。

4. 今1つは、やはり私にとって具体的な臨床実践からの課題としての、精神病院の社会復帰への関心である。八事病院・刈谷病院での私の臨床実践は、この方向に1つの力点がおかれた。特に八事病院におけるいわゆるナイト・ホスピタルをめぐる研究は、昨年にひきつづき、今年は集団精神療法的接近へと焦点づけられ、その実践の概要は、その一部を東海心理学会第21回大会(47年5月)での口頭発表として、またその一部は、本紀要19巻所載の論文としてまとめられた。

5. 精神薄弱児を中心とする障害児への関心は私にとって、一層中核の領域を占めつつある、一昨年、昨年とひきつづき、今夏もまた教育研究実習の一環として、愛知県コロニーはるひ台学園において、さらに成人精神薄弱者との新しいとりくみを求めて、同コロニー養楽荘において、精神薄弱児・者とのかわり体験を深化せしめることに努めてきたし、また臨床心理相談室では、昨年以来、母子通園形態での重度精神薄弱幼児との療育活動を仲間とともにつづけてきた。今年度まとまった研究としての発表段階には到らなかったが、「精神薄弱児の行動療法と心理療法」と題する「精神薄弱児研究」169号の特集の依頼に応じて、そこでの心理療法的接近のオリエンテーションを明らかにしてはきたつもりである。

6. さらに今1つ、私の精神薄弱児研究の大きな枠組としては、ここ4・5年にわたる適応行動尺度の検討があげられる。昨年全国の施設をまわって得られた資料約6,000のサンプルをもとに、どうやら標準化の作業がすすみ、これらの成果は、日本特殊教育学会第47回大会(47年9月、東洋大学)、および日本教育心理学会第10回総会(47年10月、お茶の水女子大)において、共同研究者富安、松田、江見との連名で、口頭発表がなされ、その概要の一部は本紀要19巻にまとめられている。なお、本研究は「適応行動尺度—社会生活適応診断—」と題し

て今年度内に日本文化科学社から上記4名の共著として上梓される運びになっている。これらが精神薄弱児・者の新しい判別の具としても、また彼らの指導に直接援

助の手をさしのべるものとしても有効なものとなることを心より願うものである。(11月30日)

## 研究経過報告

久世敏雄

### 1. 社会化に関する研究

子どもが社会化されていく過程、例えば、子どもの社会的行動が、いかに獲得され学習されていくか、さらにそれらの諸行動が獲得されていく過程に動くであろう諸機制を検討することは容易なことではない。この問題に関しては、従来の文献総覧を含め、今後の課題であるが、現時点までに、着手した研究はつぎのとおりである。

#### (1) 幼児期の社会化に関する縦断的研究

社会化に関して、共通に関心をもつ4, 5名の方の参加を得て、研究チームを構成し、これから活発な研究を展開すべく、目下、問題意識・方法の意見調整・検討中である。なお、研究の焦点は、社会化過程の方法論に集中したい意向である。

#### (2) 児童の社会化過程に関する縦断的研究

この研究は、(1)小学校6年間において、比較的変動する社会的行動—達成行動、自立的行動、道徳的判断および性役割行動—と変動しない社会的行動の区別、(2)小学校6年間における母親の子どもに対する愛情・統制の変動、(3)両者の関連の検討を目的としている。これは、名古屋市青少年問題協議会、名古屋市教育委員会による児童の心身発達の追跡研究の一貫として行なわれており、丸井教授とともに、その資料の収集、分析に努力している。

これらは、縦断的検討を意図する点で特徴をもつのであるが、何れも、フィールド・スタディであり、社会化過程に動く諸機制を検討するためには、実験的研究が望まれる。この点に関しては、他日を期するものである。

なお、社会化に関する検討は、当然のことながら、親の子どもに対する期待・願望を明らかにすることが必要である。この点に関して、統教授を中心とする過疎研究グループの収集した研究資料をもとに、「過疎地の親の子どもに期待する職業・結婚観」を検討する予定である。

### 2. 青年期に関する研究

ここでは、青年心理学の課題の検討が残されているが、最近、青年心理研究の展開過程に関心を抱いている。この過程は、初期の段階では、実態調査的研究が多

く、しだいに、仮説検討的方向で研究が進められていると思われ、児童心理研究のそれと一致することになる。この青年心理方法論の展開過程の実証的検討は、青年心理学の諸問題として位置づけることができよう。

つぎに、青年期の自我にかかわる問題として、われわれは、困った場面における自己開放性 (self-disclosure) の検討を行なっている。この自己開放性は、青年の直面する課題 (領域) や対人別 (父、母、兄弟姉妹、親友および先生) にみて、どのような差異があるかについて、中学生および大学生を中心に検討した。さらに、困った場面における自己開放性にかかわる要因として、愛情ならびに信頼感について検討しており、過日、教育心理学会第14回総会で報告した。現在までの成果は、「両親の愛情の認知と困った場面における自己開放性についての一研究」および「困った場面における親の信頼感についての一研究」(資料)として、本巻に投稿した。この問題に関しては、勤労青年に関する資料が不足しており、他日補足したい意向である。

なお、昨年来、青年の「人生観の形成」がどのようななされているかについて、日本の研究資料をもとに検討する機会が与えられた。これは、依田新編「青年心理学」に収められている。また、最近、現代青年心理学講座全7巻が依田新ほか編集として企画、刊行され始めたが、そこで、「青年と世代の断絶」について考察する機会が与えられた。近年、とみに、青年と世代の問題が注目されており、この方面の文献を収集することができた。

#### 3. 上記以外のいわゆる共同研究として、つぎの諸研究に参加している。

(1) 依田教授を中心とする総合研究「現代青年の実態と人格形成」の分担課題「青年の家庭における適応」の問題を、東海地区青年心理研究会 (大西教授会長) で調査実施している。

(2) 統教授を中心とするいわゆる「過疎研究グループ」この研究グループは、9月25日に統教授が急逝され、その支柱を失ったが、日本教育心理学会第14回総会で、「いわゆる過疎地域の家族関係」「いわゆる過疎地域の問題」として、各人それぞれの分担発表を行なった。な